

てんとう虫君通信

2021
第3号



発行 パルシステム山梨 課題推進チーム 食・農

課題推進チーム「食・農」では、組合員と役員で持続可能な「食と農」について啓発活動を行っています。組合員さんにはまだまだ認知度が低いパルシステムの産直「コア・フード」と「エコ・チャレンジ」。この環境保全や資源循環に取り組む「コア・フード」を視点を、わかりやすく情報発信をしています。

エコ・チャレンジ栽培に取り組んでいる ももっこファーム山梨 内部学習会 ご報告

「山梨に住んでいるのに、ももやぶどうの生産って実はよく知らないかも」「ももやぶどうは子どもが好き」「果物を育てるには多く農薬を使用しているイメージがあるので、農薬を減らして生産できるの？」などメンバーから声がありました。そこで、山梨のもも・ぶどう・すももの生産者であるももっこファーム山梨さんに学習会をしていただきました！

パルシステムの産直には四原則があり、「生産者」と「パルシステム」が栽培について協議しているだけでなく、組合員が直接産地や生産者と交流を持つことができお互いを理解できるようになっています。パルの産地では、豊かな未来のために環境保全型農業に取り組んでいて、生産者は「できれば農薬は使用したくない！」と考えていますが、現実的には必要に応じて使用せざるを得ない場合が多いそうです。そこでパルシステムでは独自の栽培基準を設け、人体や環境への影響が大きい化学合成農薬を避け、化学肥料の削減を通して健康な土づくりを進めることを目指しています。では…ももは農薬を使わないでどのくらい収穫できるでしょうか？なんと 0！つまり使用しないと収穫できないそうです。(農林水産省 HP より) 果樹は生育期間が長いこと、翌年にも実をつけるために樹木を健全に保つ必要があるからです。また、野菜は多品目栽培でリスクを分散しやすいのですが、果樹は農薬削減等の負荷をかけすぎてしまうと、収穫量が大きく落ち込むリスクがあるのです。生産者と消費者である私たち組合員がお互いの声を聞ける機会がパルシステムにはあるので、お互いを理解しながら持続可能な暮らしを続けて良ければいいなと思いました。ももっこファーム山梨は 8 名の生産者が 80~100 箇所(合わせると東京ドーム 1.6 倍!)の圃場で生産を行い、パルの産地である御坂うまいもの会とともに環境にやさしい果樹栽培に励んでいらっしゃいます。化学農薬は山梨県が定めた回数の半分に抑え、除草剤も使っていないので除草は大変な作業です。100 か所も除草をするなんて本当に頭が上がりません。さらに病害虫を防ぐために枝を落とすので収穫量は一般より少なく、殺菌剤を減らしているので病気が出やすかったり大変ご苦労されています。それでもエコ・チャ



レンジ基準で安心しておいしく食べてもらいたい！という思いで作られています。「取り組みを知ってもらえて良かった。交流してもっと知ってもらいたい。」と生産者さんからお言葉がありました。来年 8 月には組合員が取り組みを監査する公開確認会も予定されています。県内の産地なので、実際お会いしての交流ができる日を楽しみにしています☆ 理事メンバー N.N



ももっこファーム山梨代表 常田さん

果樹は、野菜と比較すると生育期間が長く、一度の収穫で終わらない永年作物であり、農薬を使いすぎると収穫量が大きく落ち込むリスクもあるので、減農薬で栽培するのは難しいとのことでした。私たちの食の安心安全のため、難しい果樹栽培の農薬削減に取り組んでいる生産者さんを、商品を手にとって美味しく頂いて応援していきたいと思いました。

生産者は、誰もができれば農薬は使用したくない、と考えていますが、現実的には必要に応じて使用せざるを得ない場合が多いそうです。そのような農薬を散布するときは、帽子やメガネ、防護マスク、長袖・長ズボンの防除衣、防護手袋、長靴と全身完全防備の姿で、とても大変な作業になることを知りました。春から夏にかけての暑い時期に、このような格好で頑張っている生産者さんの苦労を無駄にしてはいけな

いと思いました。また、ももっこファーム山梨を設立した目的として、若手生産者の育成と活躍の場を増やすこと、後継者たちに自由な発想と挑戦する場所を提供できたらという理由もあることを知りました。これからも、美味しい果物栽培を子供たちの世代まで続けていってほしいと思いました！ 組合員メンバー M.K



ももっこファームは資源循環型の農業を展開し、桃、葡萄を出荷しています。生産者さんのご苦労は多いです。慣行農業に比べ化学農薬を 50%削減しているので、雨が連続と病気が発生し、収量減になります。病害虫を防ぐ為、木を密植させていないので、これも収量減になります。除草剤を使わず、刈払機で草を取っているため、人手がかかります。そうした中でも将来を見据え・遊休農地の活用・就農者の育成・天候に左右されない商品の発掘・農業体験のできる交流拠点作りなどの構想もあるそうです。出荷コンテナにはこんな言葉が貼ってありました。「人生ももっこ!!」桃と共に生きてくという生産者さんの心意気を感じます。そして買い支えることが私たちにできること、と感じました。

組合員メンバー H.S

普段、口にするぶどうや桃。果物全般を生産するに当たり、農薬をふんだんに散布し、ようやく果物が実り、それを食している物と、思っていた。しかし、私自身の考えが、かなり間違っていた事に気づかされた。減農薬に力を注ぎ、樹木周辺のくさかりがかなりの重労働であり、周辺農家と共存していく為、接近している樹木農地には、農薬を散布しないという暗黙のルールさえあるとのこと。まして、果物の樹木を植えていれば良いという事ではない。のルールさえあるとのこと。果物樹木から育てる為、1~2年で果物が実るとは限らず、時間が掛かり、収穫後には、来年に向けての下準備。休む暇がない。

生産者さん達が、365日の苦労を知れば知るほど、ただ美味しい減農薬栽培らしいだけですまされず、慎んで食したい。また、来季から是非購入したいと思わずには、いられなかった。

ももっこファームの歴史にふれ、前人達の苦労を知り、その技術を後世にと、後継者育成と活躍の場を! との事、子孫の為、環境を守る意気込みに頭がさがる時しか表現できない 自分の薄っぺらさを感じた。

桃や葡萄などの生産者さんにとって、「子育てと同じ感覚なのかもしれない」と思った。 組合員メンバー N.O